The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	漢字学習法 ： モチベーションとの関連で
Author(s)	北川, 美香
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2016, 14, p. 35-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56947
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

漢字学習法
― モチベーションとの関連で ―
A way of learning kanji
– related to students' motivation

北川　美香

【要旨】

2014年度春学期に大阪大学日本語日本文化教育センターで「漢字研究」の授業を担当した際、幾つかの漢字学習法を実践し、各方法に対する学生の感想を集計した。その結果、日本人の好む語呂合わせや漢字絵描き歌といった即効性の高い方法ではなく、繰り返し漢字を書いて覚えるという地道な作業が留学生に支持されることが判明した。これは日本人高校生のような漢字学習意欲が比較的低い者に比べて、当センターに在籍する外国人留学生は漢字習得に対するモチベーションが高いせいではないだろうか。今までは、漢字を苦手とする外国人の漢字学習に対するやる気を刺激する方法、或いは漢字学習への嫌悪感を消す方法が模索されてきた。しかし、漢字を授業内でも身に付けたいという当センターの学生たちが持っている熱意に応え、漢字を書く作業――例えば書写――を授業内に取り入れてもよいのではないだろうか。

Ⅰ　序

2014年度春学期に大阪大学日本語日本文化教育センターで様々な国籍・学習経験を持つ学生に「漢字研究」の授業を行う機会を得た。当授業に登録した学生は、「日本語・日本文化研修留学生プログラム生」中心の顔ぶれであり、本来ならば、日本人大学生を上回るほど漢字の得意な学生が多く見られるはずであった。しかし、日本語能力試験Ｎ１合格を目指す授業に設定されている為か、非漢字圏からのヨーロッパ系の留学生が比較的多かった為か、割合漢字を不得意とする学生が目に付いた（登録学生全15名中、漢字圏からの留学生である中国人学生は１名のみ、韓国人学生は１人も含まれなかった[1)]）。漢字や日本語作文をさほど得意としない様子は、試験結果からも推し量られる。2013年度に開講された同じ講義題目を掲げた授業の期末テスト平均点と比べても、今回の結果は芳しくない[2)]。ちなみに2013年度の担当クラスでは中国系・韓国系留学生が16名中6名を占めていた。また、アンケートに記入された日本語の文章を読んでも、作文能力が余り高いレベルに到達しているとは思われないミスが散見される[3)]。そのため、漢字をできるだけ容易に身につけてもらう工夫を授業内で試行錯誤する結果となった。

外国人留学生に対する漢字学習法に関しては、これまで多様な方法が試され、その効果が論じられてきた。とりわけ、漢字習得に消極的な学生が漢字に対して興味を抱くようにモチベーションを刺激する方法が熱心に模索されている[4)]。私も『授業研究』第12号の「漢字の効果的学習法に関する授業報告」で幾つかの漢字学習法を提示した[5)]が、今回はその各種方法を実際に授業で実践し、学生に評価してもらった。そして、日本の学生・生徒が漢字学習法に抱く思いと同じなのか、どのような方法が留学生に効果が高いのかを考察した。

Ⅱ　受講生

まず、私の担当した受講生の構成をここで確認しておこう。

日本語・日本文化研修留学生プログラム生　12名
　　インドネシア人（３名)、ブルガリア人（２名)、ベトナム人、ベルギー人、
　　中国人、フィンランド人、インド人、イタリア人、スイス人（各１名）

短期留学日本語・日本文化特別プログラム生　３名
　　ベトナム人（２名)、ドイツ人（１名）

Ⅲ　各種漢字学習法

１．言い回しによる覚え方

最初に学生に試したのは、いわゆる「語呂合わせ」によって覚える方法である。これは日本人に支持されやすいのか、テレビ番組で紹介されたり、それを扱った書籍が何冊も発行されたりしている[6)]。例えば、「鼠」という漢字は画数が多く、普段見慣れないため書くのが難しいと感じられるのか、この漢字を覚えるための様々な言い回しが作られている。今回はその中の１つ「ウッス！レレレのおじさんの点数は４点」を紹介してみた。

①ウッスは臼を指す。②レレレのおじさんは臼の下のレレレを指す。③４点はレレレの間に点を４つ打つことを意味する。

このように語呂合わせを用いるのは、日本人、特に試験前の高校生には人気の高い方法である。化学記号や歴史の年号なども語呂合わせで覚えるのが当たり前になっている高校生にとっては、当然の手法と考えられるのだろう[7)]。

しかし、今回担当した外国人留学生にはさほど評価されなかった。面白いと感じてくれたのは４名（インドネシア人２名、ベトナム人、インド人各１名）で、それ以外の11名は多少興味を抱いたものの、漢字上達に役立つ優れた方法だとは見做さなかった。その理由を尋ねたところ、以下の幾つかに分類できる。

まず、語呂合わせを用いることで、かえって覚えるのが困難になるという点である。確かに漢字を１つ書くために日本語の文章を丸々１文覚えなければならない。これは、日本語が母語でない留学生にとって、それなりの負担になるのだろう。

それに加えて、日本語の文章をせっかく苦労して覚えても、この漢字を１つ書く為にしか役立たない、つまり、応用が利かないという難点がある。

かなりの漢字がマスター出来ていて、どうしても覚えられない残り少ない漢字に対してピンポイントに用いるのであれば、この方法は非常に効果的にもなり得るだろう。そのため、試験対策中の日本人が好むと思われる。しかし、身につけねばならない漢字がまだまだ多くあるレベルの留学生にとっては、あまり効率の良い覚え方ではないのかもしれない。

２．漢字絵描き歌

日本では昔から絵描き歌が存在する。「へのへのもへじ」や「コックさんを描く歌（棒が１本あったとさ～)」を誰しも一度は口ずさんだことがあるのではなかろうか。この中に、歌を歌いながら漢字を書いていく方法が含まれる。例えば、「髑髏」という漢字は「四の釣り針に虫を刺し、田中を串刺して女に食わす。左に骨を２つ書き、あっという間に髑髏が出来た」とポーランド民謡に乗せて歌いながら書くと、書き取り完了である。この歌は2005年３月９日放送の「ト

リビアの泉」で紹介され、82/100「へえ」を獲得していた[8)]。

しかし、この方法は日本人に概ね好評だったが、やはり留学生には余り評価されなかった。楽しい方法だと理解を示した学生が4名（インドネシア人2名、インド人、ブルガリア人各1名）いたが、それらの学生ですら、漢字を覚えるために役立つ方法だとは認めていない。また、この方法を評価した4名中3名は先程の「語呂合わせによる覚え方」を評価した学生と被っている。この3名はアジア系の礼儀正しいタイプの学生で、目上の存在である教師が折角紹介してくれたのだからと、気を遣った可能性も否定できない。それに対し、10名は「歌そのものを覚えるのに労力がかかり過ぎる」という理由から、この方法を却下している。確かにもっともな意見である。わずか2つの漢字を書くために、先ほどの語呂合わせ法以上に複雑な日本語の歌詞を暗記しなければならない。その上、曲まで覚えなくてはならないのだから、お遊びとしては楽しくても、実践的な効用という面では評価できないのだろう。

3．何度も繰り返して漢字を書く

次に、今までに挙げた方法とは対照的と呼べる非常にオーソドックスな方法を紹介してみた。繰り返し同じ漢字を書く方法である。日本人なら嫌になるほど経験した覚えがあるだろう。今でも小学生には必要な手法と勧められている[9)]。しかし、中学生・高校生ともなると、漢字を繰り返し書くのを楽しめる生徒は減っていくだろう。試験勉強で仕方なく自宅学習に取り入れている可能性はあるが、授業で積極的に書かせることは珍しいと思われる。そのせいで、現役高校生の漢字力低下が深刻化しているとの報告もある[10)]。

単純作業とも言えるこのような反復法に留学生はどのように反応するのだろう。当センターの留学生は日本の一般的な漢字学習者より平均年齢が高く、精神面での成熟度が高い為、このような単純作業には反発を覚えるのではなかろうかと予想していた。日本でも、小学生ならいざ知らず、高校生でこの方法に真面目に取り組めるのは相当素直な生徒であろう。

ところが、結果は意外なことに、漢字を手で書く必要性を感じている学生が大半を占めることが判明した。アンケート結果は以下のようになっている。

「漢字は書かなくても覚えられるので、繰り返し書くのはナンセンスである」　1名
「書かないと漢字は覚えられないので、繰り返し書く必要がある」　10名

「書かないと漢字は覚えられない」「繰り返し書くことで手が覚えてくれる」といった、この方法を肯定的に捉える意見が多く寄せられた。

1人だけ「書いて覚える方法」に懐疑的であったスイス人女子学生は「私は漢字を読むだけで覚えられるので、何度も書く必要はない」とコメントしている。コメントからも窺えるように、この学生は漢字を身に着ける能力に例外的に長けていると推察される。

この結果を踏まえると、相当数の学生が漢字を繰り返し書く学習法を欲している。漢字を書くことを多少とも取り入れた漢字の授業があってもよいのではないだろうか。シラバスに「当該授業では漢字を書く練習を取り入れる」と明記し、授業の最初に通達を徹底すれば、書かなくても覚えられるタイプの学生は登録を避けるだろうから、必要でない学生に書く練習を強制する危険性はなくなると思われる。

4．漢字の部分書き練習

3の方法を一歩進めて、1つの漢字をいくつかの要素に分解してそれを繰り返し練習する方法はどうだろうか。これも日本で伝統的に用いられている方法である。例えば、「語」という漢字なら、「言」「五」「口」の3つの部分に分けて繰り返し練習する。構成要素を活用した漢字学習法として紹介されることもある[11)]。

この方法に対する留学生の意見は賛否両論に分かれた。それぞれのエレメントを覚えやすいので漢字を身につける効果があると肯定的だったのは、約半数の6名（ブルガリア人2名、中国人、インドネシア人、インド人、ベトナム人各1名）。一方、部分書きすると全体像が分かりにくくなり、かえって覚えづらくなると反対したのは7名（ベトナム人、インドネシア人、ベルギー人、ブルガリア人、イタリア人、スイス人、フィンランド人各1名）であった。どちらかというと、ヨーロッパ系の学生に反対する者が多かった。彼らの方が、アジア系の学生より、漢字の字体全体の形を把握しにくいのかもしれない。

以上の結果を総合的に考えると、今回の授業に参加した学生は、漢字を分かち書きせずに全体として繰り返し書くことをもっとも効果的な学習方法に選んでいる。

Ⅳ　まとめ

このように漢字学習法への評価を見てみると、日本人の生徒・学生が抱く印象とは相反する感想が挙げられるように感じる。それはなぜなのだろうか。

1つ考えられる要素は、モチベーションの有無である。

日本人生徒・学生たちは、化学記号も年号も漢字も好きこのんで覚えている場合は少ない。卒業するため、テストに受かるために嫌々ながら頭に詰め込む作業に励んでいると考えられる。だからこそ、いかに楽しく、容易に記憶するかが重要になってくる。

一方で、当センターに在籍する外国人留学生たちは日本社会・日本文化にそもそも興味があって、わざわざ日本に留学して来ている。つまり、既に漢字学習に対するモチベーションが高い学生が少なくない。動機づけの必要性がもともと余り存在しないのである。

留学生に対する漢字学習法を考察した論文では、いかに漢字学習者の負担を軽くし、不安感を取り除くかに関して、どのような工夫や配慮が必要とされるかが言及されている[12)]。そして、学習者の興味を呼び覚ます方法が次々と編み出されている[13)]。

しかし、本センターの留学生の場合、既にかなりの漢字を身に着けている点、漢字学習に対するモチベーションが高い点から、地味だが効果の高い書く練習を取り入れた授業が存在しても良いのではないだろうか。幸い、最近は美しい日本語の文章を書き写すことで、日本語を味わい、字をきれいにする練習帳なども売り出されている[14)]。これを授業で扱えば、漢字を身につけたり、字を美しくしたりする効果があり、正しい書き順の指導も出来る。さらに、日本語文章能力の向上・日本文化および日本文学の紹介も行える。様々な可能性を開く契機となり得るだろう。本センターで開講されている日本文学読解や書道の授業へとつながる要素を取り入れた授業が成立するのではないだろうか。実際に書道の授業では参加学生がメキメキと実力を上げていく様子が報告されている[15)]。

最後に、太宰治の言葉の書写を授業内で行い、その感想をアンケートに記載してもらった[16)]。その結果を以下にまとめておく。否定的な意見は1つもなく、自由回答欄に自分の意見を熱心に

書いてくれる学生もいた。

①書写は楽しめましたか。
とても楽しい　4票　　少し楽しい　5票　　ふつう　4票　　余り楽しくない　0票
とても苦痛　0票

②書写は何の役に立つと思いますか。（複数回答可）
字がきれいになる　10票　　漢字が身につく　5票　　日本語の文章が身につく　5票
役に立たない　0票

③授業に書写がどのくらい取り入れられるのが適切だと思いますか。
取り入れないで欲しい　0票　　5分程度なら　2票　　10分程度なら　10票
15分程度なら　1票　　いくらでも取り入れてもらって良い　0票

④どのような書写に魅力を感じますか。（複数回答可）
有名な文学作品の一部　11票　　ことわざ　5票　　難しい漢字　4票　　流行語　1票
どれも興味がない　0票　その他（世界的な名言を日本語に翻訳した文　1票）

⑤授業に取り入れるなら、どんな形式が良いと思いますか。（複数回答可）
文学作品の説明と共に　10票　　漢字の成り立ち説明と共に　3票　　最近の流行語を解説しながら　3票　　ことわざの説明と共に　1票　　どんな形式でも取り入れて欲しくない　0票
その他（授業時間を使って漢字を覚えられたらいいと思います　1票）

このアンケートを見ても、学生たちは授業中に漢字を書く作業を通して、漢字を身につけたいという意識が高いようである。当センターの留学生たちが漢字習得に対して抱いている熱意を汲み取り、書写を少し取り入れた授業を行ってもよいのではなかろうか。どのような書写が漢字学習に役立つかは今後の課題となってくるだろう。

注

1）アンケートの集計総数に変動があるのは、授業により欠席者数が異なる為である。

2）2014年度平均　57.73／80　2013年度平均69.06／80

3）アンケートに回答されていた誤った日本語の例を挙げておこう。カッコ内が正しい表現である。
「どちらが難しいです（どちらも難しいです）」
「いつ、どのふうに漢字を使うのが難しい（いつ、どんなふうに漢字を使うのかが難しい）」
「漢字の使い場合（漢字を使う場合）」
「形を覚おうとする（形を覚えようとする）」
「役に立てないだと思う（役に立たないだろうと思う）」

4）一例は以下のようである。池田庸子（2007）「非漢字圏学習者の漢字観に関する事例報告」『茨城大学留学生センター紀要』5，茨城大学留学生センター，31-40.

5）北川美香（2014）「漢字の効果的学習法に関する授業報告」『大阪大学日本語日本文化研究センター授業研究』12，大阪大学日本語日本文化研究センター，17-21.

6）『書けない漢字が書ける本―語呂合わせで覚える超難書漢字』（根本浩（2009），角川書店）、『マンガで簡単！暗記丼』（後藤裕之（2011），祥伝社）はその例である。

7）高校生向けの参考書には無理矢理こじつけたような語呂合わせが満載されている。http://matome.naver.jp/odai/2142148434500084201（2016年１月23日最終確認）
暗記法を紹介した書物でも語呂合わせの作り方が載せられている。http://jissenn-bennkyou.jp/kanren/（2016年１月23日最終確認）

8）http://oride.net/trivia/trivia036-042.htm（2016年１月23日最終確認）

9）「初期段階として『手で覚える』ことを優先しましょう。小学生のときに『書いて覚える』訓練が不足しているせいか、形がとれない方が目立ちます。」高畠尚弘氏は以上のように主張している。http://www.zkaiblog.com/jr07/51041（2016年１月23日最終確認）

10）大修館書店が現役高校生310名を対象に漢字で書けるかどうかのアンケートを実施したところ、たとえば「歌舞伎座」という漢字を49.4％の高校生が書けなかった。「現役高校生の深刻な漢字力」2013/5/2 http://bg-mania.jp/2013/05/02097752.html（2016年1月23日最終確認）

11）池田幸弘（2009）「漢字基礎調査――構成要素を活用した漢字学習・教育へ向けて――」，『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』16，横浜国立大学留学生センター，99-116.

12）「非漢字圏初級学習者に対する漢字の指導」（前原かおる（2005）『東京大学留学生センター教育研究論集』14，東京大学留学生センター，1-17）では、実生活で漢字を正確に書く必要のない学習者には「書く」負担を軽減する方向での提言や取り組みが紹介されている（p.1）。読み書き練習をやめようという提案もある（p.2）。

13）漢字を書く練習を減らし、一方で実生活での漢字の用法に注目することが勧められる場合もある。これは、留学生の不安感を軽減し、漢字自体への興味を育成して、有用性を認識させるためである（佐藤保子（1992）「漢字学習における動機づけと効率的指導の工夫」『東北大学日本語教育研究論集』7，東北大学，75-93）。

14）『夏目漱石をまねる美しい日本語書き写し文章術』（高橋フミアキ（2012），コスモトゥーワン）、『相田みつをの『本気』で書き写し』（相田みつを（2006），文化出版局）、『出口汪の思わず書き写したくなる美しい日本語練習帳』（出口汪（2014），ディスカバートゥエンティワン）等。

15）書道を学び、実践することで「文字に対する理解・関心が高められる」と指摘されている（p.136）。（福光敬子（2005）「留学生にとって『書道』とは？」『大阪外大留学生日本語教育センター授業研究』3，大阪外国語大学留学生日本語教育センター，121-136）

16）書写したのは以下の言葉である。「人間の生活の苦しみは愛の表現の困難に尽きるといってよいと思う。この表現のつたなさが人間の不幸の源泉なのではあるまいか。」（太宰治）「ペン字の味方」http://www.penji-mikata.com/（2016年１月23日最終確認）

（きたがわ　みか　本センター非常勤講師）